

恐山と北方の日本 ～ 生きる意味と死ぬ意味

Osore-zan and the Northern Japan – To Live and to Die

■ 恐山信仰

・ 死者の赴く山、恐山

青森県下北半島の恐山は「死んだらお山に登る」と死者の赴く地として知られ、毎年7月の大祭には日本全国から人々が参詣にやってきて身内の死者を供養します。

・ 地藏菩薩、三途の川原、そしてイタコ

恐山は宇曽利湖畔の聖地です。そこは三途の川原と呼ばれ、硫黄が吹き出す地獄のような景観が展開し、平安時代に慈覚大師が開いたとされ地藏菩薩を祀る、釜臥菩提寺が建っています。また、死者の口寄せをするイタコが集まることでも知られています。

■ 山中他界とイタコ

・ 山中他界と海上他界

死者は山に行くという考えを「山中他界」と言い、日本各地の山岳信仰の基本となっています。この考えは、沖縄のニライカナイ伝説などの「海上他界」とも通じ、恐山もそうした山岳信仰の地の一つとして、修験道とも結びついて江戸時代から多くの人々が参拝に訪れて来ました。



・ 山岳信仰と修験

修験道は密教や山岳信仰、陰陽道などが融合した日本の独特の宗教です。江戸時代には各地で多くの修験道教団が生まれ、互いに勢力争いをしました。恐山も勢力争いに巻き込まれましたが、結局、奈良県熊野を拠点とする熊野修験が恐山を勢力下におき、修験の修行の場としました。

・ イタコ

恐山はイタコでも有名です。シャーマンであるイタコは、もともと津軽半島や八戸などで、オシラサマという神様の儀礼を行っていましたが、大正時代以降、特に第二次大戦後、恐山の大祭に来て死者の口寄せをするようになりました。イタコはまた津軽半島の金木の川倉地藏尊が有名で、オシラサマ信仰では弘前の久渡寺が有名です。



■ 北方日本と恐山

・ 交易の中心地として栄えた北東北

恐山信仰が全国的に知られるようになるのは、江戸時代の北陸商人の活躍があります。江戸時代には北東北は、西廻航路、東廻航路、蝦夷航路の3つの結節点として栄え、物流の中心として多くの北陸商人がやってきました。恐山は彼らの信仰を集めたのです。

・ アジアの中の北東北～津軽安藤氏の活躍

北東北が交易で栄えた理由の一つが、中世の津軽安藤氏（安東氏）の活躍です。奥州藤原氏など東北の豪族は古代から交易で栄えてきましたが、鎌倉・室町時代に津軽半島の十三湊を拠点にした津軽安藤氏も、蝦夷から樺太（さらに沿海州）まで影響力を及ぼし、東北から九州までの日本海の海上交易を支配しました。こうして、千島から本州、南西諸島を経て中国・東南アジアに至る大交易ルートが生まれ、その経済ルートの中で恐山信仰も発展したのです。



■ 恐山をめぐる生と死

・ 生の儀礼と死の儀礼～重層的な恐山信仰

恐山信仰は一つの信仰ではなく、複数の信仰が重なりあったものです。その中心には、地元の人々の地藏講による春詣りと秋詣りを中心とした生の儀礼、そして東北各地や全国の恐山講も参加しての、夏の大祭を中心とした死の儀礼があります。そしてその周囲に、イタコの口寄せや地藏信仰、修験道があります。



・ 死者を悼む、死者に出会う

釜臥菩提寺は地藏堂です。この地藏堂の祭壇の裏手には、小さな子供を亡くした親たちがおいていった、子供の形見や写真がところ狭しと奉納されています。こうした親たちは死んだ子供に会うために大祭にやってきて、そして宿坊に泊まり盆踊りを踊ります。この宿坊では、冬に霊に出会った人も沢山います。

・ なぜ恐山か

経済的に豊かになり、科学も発達した今日、なぜ人々は恐山に死者に会いに行くのでしょうか。そこには、合理性だけでは理解できない理不尽な偶然の中に生きるひとびとの、一つの人生の意味があるのです。